

ハナがやって来るようになってから、二匹の犬と一匹の猫が、庭でよく遊んでいる姿がみられた。

そうこうしているうち、クロフカは次第にこの界隈の犬たちの縄張りが判ってきた。

以前に出会った白い大きな犬は、葡萄酒工場の犬でジャックと言った。そして、その東隣にある地主の屋敷には、チャーコフというよく吠える小さな犬が住んでいる。

また広いブドウ畑をはさんで北隣には、大きな四角い建物がある。犬たちの間で、その要塞のような建物に近づく二度と帰れなくなる……という噂が流れた。

マーサおばさんのお気に入りの散歩道は、運河沿いの並木道だ。

アカシアの並木道は、季節ごとに様々な表情で道を彩る。

クロフカは、マーサおばさんの散歩のお供が大好きだった。

ある日、いつものようにマーサおばさんと散歩に出かけた。

最近のクロフカは、手入れも行き届いて毛艶も良く、また体格も以前にも増して大きくなり、その堂々とした風格は飼いだとしても立派なものだった。クロフカを見る人は大抵誰でも、その大きさと貫録に感心した。

その日も、いつものように運河沿いの並木道を散歩していると、向こうからも散歩のひと組がやってきた。

中年の男に引っぱられて歩く、うす茶色で少し濃い茶のブチが頭の半分と、背中の辺りにとんでいる。

クロフカは立ち止まった。

あいつ、見覚えがある。

クロフカの眼が陰しくなった。

…あいつはたしか…

雨宿りをしようと軒先を探していた時に、クロフカに吠えかかった犬である。

驟雨だった。

…あの日も、すごいどしゃ降りの日だった…

軒先で、雨の滴を振り払っていた時、突然

「 やいやい！ここは俺様の家だぞ！勝手にうちの前を通るな！ここは俺様の縄張りだぞ！ 」

あまり間口の広くないその家は、小さな車と植込みの草花が雑草に埋もれ、辺りには壊れた植木鉢が散らかっていた。

やたらに吠えたてるので、少し傾いだ玄関の扉が軋んだ音をたてて開き、家人が現れ、犬と一緒にになって、庭の箒でクロフカを追いたてたのである。

「 ふん！どんなもんだい！ きたない野良犬！二度と俺様の家の前を通るんじゃないぞ！ 」

あまり大きくない雑種のその犬は、走り去るクロフカの背に、追いうちをかけるように言い放った。

その犬とその飼い主が、並木道の向こうから現れたのだった。

… あの時のおいっだ！…

しかし、そう思ったのは、クロフカばかりではなかった。

また、相手の驚きとその狼狽ぶりは、クロフカどころではなかった。

相手の犬は、クロフカと目を合わせたとたんに、一瞬ビクツとして立ち止まり、その後飼い主がいくら引き綱を引っ張って促しても、後ずさりして動こうとはしない。位負けたのである。

クロフカも、ちよつと身構えたが、マーサおばさんは、リードを短く持ち直すと、クロフカの頭をそつと撫でた。

「大丈夫よ、クロフカ…：行きましよう」

そして、ゆっくり歩きだした。

相手の飼い主は、その時の追いたてた犬のことなど、すっかり忘れていたようだった。また、まさかあの時追いたてた犬が、今出会っている大きな飼い犬とは想像もつかなかっただろう。

クロフカは視線を相手の犬から決して離さない。

二匹の犬の距離がだんだん近づいてくる。

人間同士、軽く会釈してすれ違い、犬同士は、すれ違いざまに、さらにしっかりと目を合わせた。

明らかに、位の優劣が決まった瞬間だった。

「よ、よお…：」

「よお…：」

「お、お前、あそこの製材所にいるんか…：」

「ああ、そうだよ」

「そ、そうだったんか…：」

相手の犬は、尻尾を下げて丸めこみ、飼い主に引っ張られるようにして通り過ぎた。

クロフカはますます姿勢を正して胸を張り、マーサおばさんを見上げながら、彼女の脇に寄り添って歩いた。

「クロフカや：：偉かったね：：喧嘩しなかったね、お前は賢いね：：いい仔だ、いい仔だ」

マーサおばさんは、歩きながらクロフカの頭を撫でて褒めた。
クロフカは、嬉しかった。

ナーヤさんとも、よく散歩に出かけた。

ナーヤさんは来るたびに、クロフカにブラシをかけては犬の帽子を被せたがった。

「だって、絵になるじゃない：：似合うわあ」と、よくそう言っていた。

しかし、被せられた側としては、うっとしくて、すぐに首を振り立てて、帽子を取ってしまった。

時々ナーヤさんは、自分がスケッチをしたいために、リードを外して、無人の河川敷で勝手に遊ばせてくれた。

また、河原に行き、気が向くとプラスチックの円盤やバトンを投げて「とってこーい」と呼びかけ、よく遊んでくれた。

クロフカは、持ち帰りゲームは好きだったが、河原であまり何度も繰り返すのはあまり気が進まなかった。

かつて、置き去りにされた時の記憶がよみがえるのである。

そればかりでなく、家の前や散歩の途中でも、シルバーと濃い青色をしたツートンカラーのジープ型の車が通るたび、必ずとっていいほどクロフカはかつての飼い主を思い出し、その車に向かって大声でウオン

ウォンと吼えた。

「ボクここです！ここです！置いてかないで……！」

その度に、モモに呆れられた。

「ばっかねえ……今あるのは誰のおかげだと思ってるのよ……！」

クロフカ自身も分かってはいたが、どうにもそれを止めることは出来なかった。

その癖が消えるまで、長いことかかった。

ある日、クロフカがいつものようにポーチに座っていると、どこから声がした。

「よう！若造じゃねえか」

声のする方を見ると、いつかの折れ耳の赤犬だった。

こちらが返事をするまでもなく、開いている門から中に入ってきた。相変わらずあの斜め歩きでこちらに頭を低くして近づいて来る。

「なんだ、ちっとも姿見ねえと思ったら、ここにいたんか」
「……おう……」

「なんだか立派になっちまって、すげえな」

「何か用かい？」

「またまた、やだなあ、『何か用かい』は、ねえだろう。一緒に

ニワトリ追っ掛けた仲間じゃないすかあ」

クロフカは、身構えて立ち上がると真っ直ぐに向き直った。

「おととと…」

赤犬は慌てて一步下がった。

やけになれなれしく近づくこの赤犬に、あまり関わりたくなかった。がその反面、媚へつらうように尻尾を低くするこの情けない赤犬に対して、自分の今の様子を少し自慢したい気持ちもなかった。

「へっへっへ…親分、そうですけど、親分ですけど。これからは親分みてえな若い世代が、活躍する時代ですけど」

やけに誉めそやして媚を売ろうとする。

「それにしても広いお屋敷だ…。醸造所んところにも引けを取らないりっぱなもんですぜ、へっへっへ…」

「いい加減に帰ってくれ…」

「ちっ！ けちくせえな…：せっかく子分になって親分のことをお守りしようって言うてやってるのに…」

「いや、いいよ…：たくさんだ…」

クロフカは一步前を出掛かったが、赤犬との間には庭を仕切っているフェンスがあって、飛びかかろうにも飛びかかれぬ。

「へっへっへ…：番犬てえのは、案外不便なもんですね…：そのう

ち、気が変わったらまたニワトリでも食いにいきやしょう……」

「 黙れ！…… 」

クロフカはフェンスに飛びかかり、吠えたてた。

犬の吠え立てる声を聞いて人が建物から出てきた。

その気配で、赤犬は慌てて門の外に飛び出していった。

クロフカは、それからしばらくの間、気が立っていた。

つづく